資　料

COVID-19 感染状況の変化に対応した老年看護学実習方法の検討

金子　由里*　　溝部　昌子*　　吉原　悦子*

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大に伴い、看護基礎教育課程における 3 年次後期の臨地実習形態を変更し、実施した。

老年看護学実習は、高齢者特有の健康問題、高齢者理解、関係性構築、高齢者看護技術、チーム医療、生活自立支援、高齢者観、専門職としての行動を理解する必要がある。学内実習では、高齢患者に起こりやすい転倒転落リスク状態や活動耐性低下、介護者役割緊張、自尊感情状況的低下の看護診断が立案されるよう情報を組み込んだペーパーペイシェント事例作成による看護過程展開を行った。また、倫理課題、継続看護、KYT を用いた患者安全を検討した。臨地実習では、担当患者を中心に幅広い対象の看護技術見学や臨床指導者との遠隔講義、医療チームカンファレンスに参加した。学生の主体性を高め、看護実践能力の育成ができるように今後も実習病院と検討し、修正を重ねていく必要がある。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、老年看護学実習、臨地実習、学内実習、教材検討

Ⅰ．はじめに

老年看護学実習は、高齢者の生活の場の多様化に伴い、1996 年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正で実習単位として独立した。医療機関で治療を受ける高齢者への看護だけでなく、複数の既往疾患を有しながらも長期間にわたり療養生活する高齢者に対する看護への教育も重視されるようになった。更に 2007 年の看護基礎教育の充実に関する検討会で、老年看護学は家族形態の変化で高齢者と接する機会が減っている学生が生活背景を踏まえ、生活機能の観点からアセスメントし、看護を展開する方法を学ぶとされた。臨地実習では、高齢者とコミュニケーションや看護技術を通して、身体・心理・社会的な特徴を知り、具体的な看護実践をする上で重要な役割を求められると同時に多職種チームにおける看護師の役割を学ぶことや保健医療福祉との連携・協働を通して看護を実践できる能力を養うために多様な場で実習することが求められた[1)]。

本学カリキュラムにおける老年看護学実習は 3 年次の後期に開講し、老年看護学実習Ⅰ（2 単位）：回復期、急性期、慢性期療養型病院で 2 週間、老年看護学実習Ⅱ（1 単位）：高齢者施設（特別養護老人ホーム、介護型ケアハウス、認知症高齢者グループホーム）で 1 週間の構成である。2020 年 1 月、新型コロナウイルス感染症が日本で確認されて以降、全国へ感染が拡大し、緊急事態宣言や福岡県独自のまん延防止等重点措置が発令され、本学の COVID-19 対策班の下、新型コロナウイルス感染拡大の BCP レベルに則り、大学の講義・演習・実習は大幅な変更を行った。日本看護系大学協議会の調査報告（2022）[2)] では、臨地実習で計画変更が必要になった大学は、回答した全国 287 校のうち 247 校（86.1%）で、殆どの大学が実習内容変更を余儀なくされた。同時に文部科学省、厚生労働省（2020）から、臨地実習は実習施設変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難な場合は実状を踏まえ、演習または学内実習等を実施することで必要な知識及び技能を習得することとして差し支えないと通達された[3)]。また大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会では、看護学実習は学生が学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科

＊西南女学院大学保健福祉学部看護学科

目の看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証を通して実践へ適用する能力を修得する授業で、病院、施設、在宅、地域等の多様な場で多様な人を対象として援助することを通し、対象者と関係形成を中核とし、多職種連携で必要とされる連携・協働能力を養い、看護専門職の批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指すとしている[4)]。これらの背景の中で、新型コロナウイルス感染症拡大下で感染予防を徹底し、実習経験が少ない中でも看護実践能力の育成、多職種連携の重要性理解に繋がるよう実習病院と協議調整を重ね、協働しながら進行した老年看護学実習の取り組みについて報告する。

Ⅱ．老年看護学科目の概要

本学では、老年看護学科目は専門分野に位置付けられ、2 年次前期に知識や理論を学修する老年看護学概論 1 単位、2 年次後期にアセスメントや看護技術の老年看護方法論 2 単位、3 年次前期に高齢者特有の看護問題や看護実践技術の老年看護学演習 1 単位、3 年次後期老年看護学実習Ⅰ 2 単位、老年看護学実習Ⅱ 1 単位で構成している。

Ⅲ．老年看護学実習の方法

1．臨地実習及び学内実習の日数

1）老年看護学実習Ⅰ

新型コロナウイルス感染症拡大以前は 2 週間実習のうち臨地実習 8 日、学内実習 2 日であった。各実習施設の実習生受入れ指針及び感染対策指針、本学の感染予防対策指針に則り、施設毎に感染予防対策をすり合わせ、感染状況に応じて毎週実習方法を実習病院と検討した。感染予防対策上の制約から 1 病棟 3 人までの受入れ制限のため 1 グループを 2 班に分け、交互に隔日実習とし、学生 2 ～ 3 名で患者 1 名を担当した。政府発令の緊急事態宣言期間中、臨地実習は行わず、学内実習やオンライン実習に変更した（図 1）。福岡県独自のまん延防止等重点措置期間中は実習施設と協議・調整を重ね、病院内でカルテ閲覧実習を行った。

2）老年看護学実習Ⅱ

新型コロナウイルス感染症拡大以前は 1 週間実習のうち臨地実習 4 日、学内実習 1 日であった。しかし新型コロナウイルス感染症拡大で、高齢者施設内でのクラスターの多発、重症化リスクが高いことから学生入館は困難で、PCR 検査陰性であることを確認した教員 1 名が入館した。施設内とオンライン接続して実習を行った（図 2）。本学の新型コロナウイルス感染拡大の BCP レベルに応じて、学生は学内もしくは自宅からオンライン実習をした。

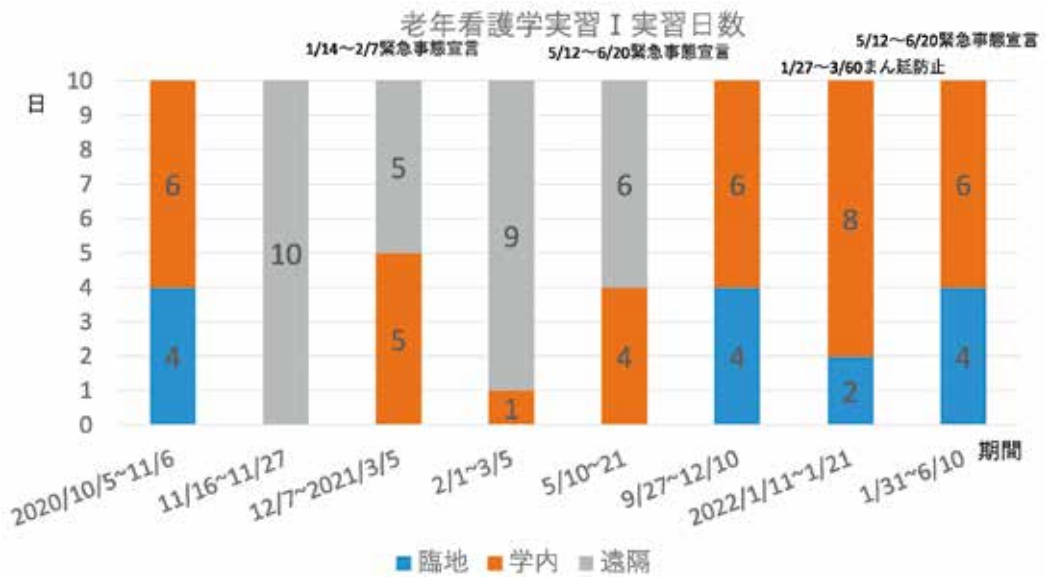

図 1．老年看護学実習Ⅰ実習日数

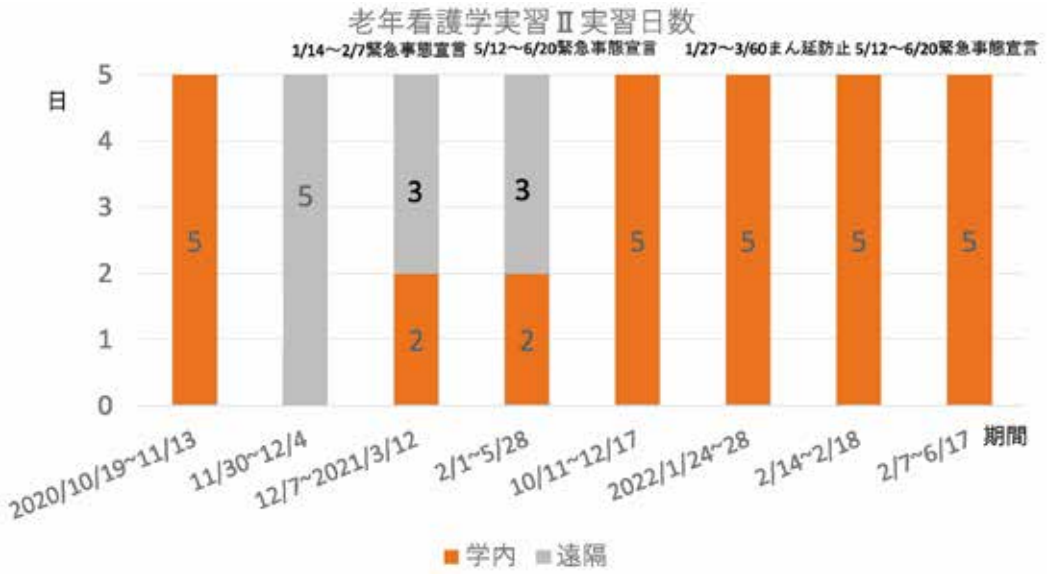

図2．老年看護学実習Ⅱ実習日数

2．感染予防対策

老年看護学実習Ⅰは、実習施設の実習生受入れ指針に基づき、実習病院内更衣室や学生控室、昼食摂取場所を同時に3人までの利用とした。その他、PCR 検査陰性証明の提出、実習2週間前からのアルバイト自粛、同居家族の症状観察・報告、昼食時マスク除去時間の記録、共に食事摂取した人の体調と行動を記載した。教員は学生が記載した体調と行動の記録用紙を毎日確認し、体調把握を行い、実習病院に報告した。患者とのコミュニケーションは距離を確保した上で1回15分以内、フェイスシールドの装着、通学時、午前、午後のタイミングでマスク交換を義務づけた。

老年看護学実習Ⅱは、教員はフェイスシールド装着の下、距離を確保し、入所者と接触した。行動自粛制限及び体調管理、感染予防対策を実習2週間前から計5週間記録した。

3．老年看護学における実習内容

1）老年看護学実習Ⅰ（表1）

(1) ペーパーペイシェント事例の看護過程展開（学内実習）

2020年度は4事例（急性大動脈解離後脳梗塞、大腿骨骨折、頚椎症性脊髄症、クモ膜下出血）、2021年度2事例（糖尿病、慢性閉塞性肺疾患）を過去の実習から高齢患者に起こりやすい転倒転落リスク状態や活動耐性低下、介護者役割緊張、自尊感情状況的低下を看護診断として意図的に事例に組み込んだ教材を使用した。さらに ICF モデルを用いて患者概要を分類し、在宅生活で必要となるサービスのケアプランを作成して、入院中の看護を検討する継続看護の展開にも用いた。記録物は個人所有のパソコンに保存せず、大学から付与されたアカウントから Google Classroom にログインし、ドライブ上でファイル共有、編集をした。また固有名詞や個人特定に繋がる情報を記載しないよう倫理的に配慮し、個人情報の保護に努めた。実習最終日に学びの報告会をした。

(2) KYT を用いた高齢者の患者安全（学内実習）

病室の療養環境、車椅子による患者移送、入浴介助の3場面のイラストを用いて、危険予知トレーニングを行った。このイラストに基づき、不要物品やコード類の整理不足で生じる転倒、車椅子移送中患者のチューブ類の巻き込みによる事故、入浴介助時の湯温や排出口確認不足の熱傷など1場面に危険要因を10個以上、意図的に組み込み、現状把握、事故の原因究明、予防対策のディスカッションし、レポート作成を行った。

(3) 患者が語る動画教材の視聴（学内実習）

病気を経験した患者が体験談や想いを語る DIPEx（Database of Individual Patient Experiences）Japan[5] の高齢認知症患者及び脳出血後視床痛患者の語りを視聴し、患者の心情や傾聴の意味、看護介入方法についてディスカッションし、レポート作成を行った。

(4) 医療ドラマの視聴に基づく、倫理課題のディスカッション（学内実習）

救命医療現場がリアルに描写されている医療ドラマ（Universal Television 社作成「シカゴ・メッドシーズン 2#14 吹雪」）を視聴し、多重事故におけるトリアージや医療資源が限られた中での人工呼吸器や輸血の優先順位、治療選択をせざるを得ない患者や家族の葛藤などを医療者の見解やチームでの検討の在り方についてディスカッションし、レポート作成を行った。

(5) 事例患者及び担当患者の把握のためのグラフィックレコーディング（学内実習）

文字や絵で 1 枚の用紙に情報を整理するグラフィックレコーディングの手法を用いて、担当患者の全体像把握や病態看護問題関連図では表現不可な患者の希望や思い、家族の心情を可視化した。

(6) 臨地実習指導者による臨床講義（遠隔実習）

本学での新型コロナウイルス感染症クラスター発生に伴い（2020 年 11 月～ 2021 年 5 月）、臨地実習が行えなかった期間は遠隔で臨地実習指導者の講義を受けた。内容は病院概要、院内感染対策、多職種チームの看護師役割に加え、看護師のやりがいや患者との関わり方について看護師と学生が意見交換する場を設けた。

(7) 高齢者看護技術（臨地実習・学内実習）

臨地実習では担当患者に限定せず、看護技術場面や検査の見学をした。見学した看護技術は、清拭や入浴介助、足浴などの保清の看護技術が 8 割で、ベッドメーキング、経管栄養や血糖測定、薬剤投与であった。学生が看護技術見学や検査に同行する場合は、教員と共に事前に患者情報を電子カルテで情報収集し、手順や根拠について事前に確認した。臨地実習困難時の学内実習では学生間で携帯型超音波血流計（Hadeco）を用いた ABI（Ankle Brachial Pressure Index）測定による下肢血流評価、残尿測定計（リリアムα-200）を用いた残尿測定、体圧計（パーム Q）を用いた体圧測定、褥瘡モデル（VATA 褥瘡ケアモデル）を用いた褥瘡評価、義歯洗浄を行った。また高齢者特有の看護技術として、食事介助、ティルト型車椅子への全介助車椅子移乗、理学療法士による長下肢装具使用の歩行訓練、歯科衛生士による嚥下障害患者の口腔ケアについて、実習施設に動画教材の作成を依頼し、大学内で教員の指導の下視聴し、学ぶ機会を得た。

(8) 豊かな生を支える看護計画（臨地実習・学内実習）

患者の発達段階に応じた人生への意味付けや苦痛の緩和、癒しを目的として通常の看護に加えて学生の企画で、患者と共に時間を過ごすアクティビティを例年取り入れている。コロナ禍で実習期間が短く、患者との関係性が築きにくい面があったが、患者が得意な料理を聴取して学生が自宅で再現調理をし、写真を掲載したレシピ集や治療意欲・セルフケア向上への生活上の注意や活動拡大に向けた工夫点をまとめた生活指導パンフレット作成をした。実習施設入館困難時は学内で学生が患者役と看護師役の両者になり足浴ケアを実施し、学内入構困難時はオンライン上で患者役と看護師役をし、筋力維持や転倒予防のための体操指導をした。

(9) 医療従事者間の申し送り及びカンファレンス見学（臨地実習）

看護師、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士など多職種間での勤務交代時の申し送りやミーティング、チームカンファレンスの見学をした。見学後、教員と情報伝達内容や意図、コミュニケーション方法、チームナーシングの在り方、看護師の役割を確認した。

表 1.　老年看護学実習Ⅰ　実習評価項目及び評価方法・内容

実習評価項目	評価方法・内容		
	従来	2020 年度	2021 年度
1. 高齢者看護技術			
（ア）加齢性の心身変化に伴う高齢者特有の危険に配慮できる	担当患者看護技術見学	・実習病院依頼による動画視聴 ・学内技術：ABI 下肢血流評価、残尿測定、体圧測定、褥瘡評価、義歯洗浄 ・臨地実習：担当患者に限らない看護技術見学	
（イ）高齢者特有の看護問題に適切なケアの実施手順、ベストプラクティスに基づき、安全にケアを実施できる			
2. 高齢者の理解と看護過程			
（ア）対象の生活歴、価値・信念、発達課題を多面的に捉える	・担当患者疾患プレゼンテーション ・担当患者の看護過程	ペーパーペイシェント疾患プレゼンテーション ペーパーペイシェント事例看護過程展開 2020 年 ・急性大動脈解離後脳梗塞：麻痺、機能訓練 ・大腿骨骨折：術後機能訓練、認知機能低下 ・頚椎症性脊髄症：術後、身体機能低下 ・くも膜下出血：構音障害、認知機能低下 2021 年度 ・糖尿病：糖尿病合併症、インスリン投与 ・慢性閉塞性肺疾患：急性増悪 ・グラフィックレコーディング	
（イ）複数の併存疾患や病態、治療歴、生活歴を関連付けて説明できる			
（ウ）高齢者の薬物療法の特徴をふまえて健康観察できる			
看護診断と看護計画			
（ア）加齢性の心身変化、高齢者の特有の疾病や病態の知識を活用してアセスメントし、健康管理上の問題を明らかにできる	担当患者の看護過程	・ペーパーペイシェント事例看護過程展開 ・臨地 SOAP	
（イ）エビデンスに基づき、患者・家族中心のアプローチで看護計画を策定できる			
（ウ）現在の状態と患者の希望に応じて、段階的な看護目標を設定できる			
（エ）実施した看護とその反応を記録し、エビデンスとの一致について振り返り評価できる			
3. 対象との関係性の構築			
（ア）感覚機能低下、認知機能低下を考慮して有効な方法でコミュニケーションをはかる	担当患者とのコミュニケーション	・担当患者とのコミュニケーション ・DIPEx（Database of Individual Patient･Experiences）Japan 動画カンファレンス	
（イ）高齢者の意思を汲みとり、理解するよう努め、時に高齢者の意思を代弁する			
（ウ）患者観察、ケアの提供、コミュニケーションなど様々場面で高齢者の尊厳を守る倫理的行動がとれる			
4. チーム医療			
（ア）多職種協働チームにおける各職種の役割を理解し、看護職の責務を説明できる	医療従事者間の申し送り及びカンファレンス見学	・医療従事者間の申し送り及びカンファレンス見学 ・臨地実習指導者による臨床講義 ・universal television 社作成医療ドラマ「シカゴ・メッドシーズン 2#14 吹雪」視聴による倫理課題ディスカッション ・KYT を用いた高齢者の患者安全	
（イ）チームの一員として、患者健康成果の向上に効果的にかかわる			
5. 高齢者観			
（ア）何らかの障害のある高齢者におけるサクセスフルエイジングについて検討する	・担当患者の看護過程 ・豊かな生を支える看護計画	・ペーパーペイシェント事例看護過程 ・豊かな生を支える看護計画	
（イ）高齢者の健康をより良い水準に保つための看護について検討する			
6. 生活自立支援			
（ア）エビデンスに基づいた指標やツールを活用し生活機能を客観的評価するとともに、患者の困難や希望など主観的状態についても理解する	担当患者の ICF・ケアプラン立案	・ペーパーペイシェント事例看護過程展開	
（イ）高齢者の生活自立支援のために利用できる制度や、有効なサービスについて検討できる		・ICF モデルによる患者概要分類・ケアプラン作成	
（ウ）リハビリテーション看護の原則を適用できる		・ペーパーペイシェント事例看護過程展開	
7. 専門職としての行動　　（割愛）			

2）老年看護学実習Ⅱ（表 2）

(1) 高齢者施設の多職種による臨床講義（遠隔実習）

高齢者施設内でオリエンテーションをしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大以降、遠隔講義に変更した。看護師、理学療法士、管理栄養士、相談員に多職種の役割についての講義を受けた。

(2) 高齢者とのオンラインコミュニケーション（学内実習・遠隔実習）

高齢者施設と学校側で通信環境を確保し、入所者居室とオンライン接続をし、スピーカー（YAMAHA ユニファイドコミュニケーションスピーカーフォン）を用意してコミュニケーションの機会を設けた。

(3) 入所者の全体像把握のための情報収集（学内実習・遠隔実習）

従来は学生がカルテで情報収集をしていたが、教員が収集した施設入所までの経過や疾患名などの情報やコミュニケーションでは不明な身体機能状況や家族関係を介護スタッフに聴取し、ICF モデルを用いて、入所者の概要を把握した。

(4) 入所者の生活史聴取（学内実習・遠隔実習）

コミュニケーションで得た情報を時代背景やライフイベント毎に整理して生活史とし、高齢者が生活史を語る意義、援助者が生活史を聴く意義をまとめた。オンラインコミュニケーションの時間は 30 ～ 40 分程度と限られ、十分に聞き取りを行うことが難しかったがメンバー間で協力しながら情報交換をし、作成した。

(5) 豊かな生を支える看護計画（学内実習・遠隔実習）

学生はコミュニケーションを通して入所者が人生で大事にしてきたことを汲み取り、共に習字をしたり、過去から現在に至るまでの生まれ育った町並みや風景の写真を収集し、媒体として用いて人生を回顧することができるように働きかけた。オンライン上でも実践可能であり、学生は工夫しながら実施した。

表2．老年看護学実習Ⅱ　実習評価項目及び評価方法・内容

実習評価項目	評価方法・内容 従来～2021 年度
1. 高齢者看護技術	
（ア）常に高齢者の自立、安全、安楽に配慮できる	・高齢者看護技術見学：胃瘻の栄養注入、食事、リハビリテーション ・医療リスクマネージメントカンファレンス
（イ）高齢者施設においての根拠に基づいたケアを理解することができる	
（ウ）高齢者施設におけるリスクマネジメントについて理解を深めることができる	
2. 看護過程	
（ア）加齢や疾病・障害によって影響をうけた高齢者の生活機能をアセスメントすることができる	・入所者全体像把握のための情報収集 ・担当入所者 ICF モデル分類 ・豊かな生を支える看護計画
（イ）ICF の視点をもって情報を整理することができる	
（ウ）各項目を関連付けた全体像を説明することができる	
（エ）ICF の相互作用の視点をもって高齢者の強みや生活上の課題を明確化することができる	
（オ）高齢者の生活機能維持・改善に向けた具体的な目標を設定し、支援方法を立案し、その根拠を述べることができる	
3. 関係性の構築	
（ア）感覚機能低下、認知機能低下を考慮した方法でコミュニケーションをとることができる	・入所者とのオンラインコミュニケーション
（イ）相手からのメッセージを正確に受け取り、自らのメッセージを正確に伝える姿勢をもつことができる	
（ウ）高齢者のこれまでの人生について興味を示し生活史を聞き取ることができる	・入所者の生活史聴取
（エ）高齢者の意思を尊重し、個の人間としての尊厳が保たれる行動を行なうことができる	・入所者とのオンラインコミュニケーション
4. 医療福祉の連携	
（ア）各施設における看護師の担う役割について理解することができる	・高齢者施設の多職種による臨床講義 ・入所者全体像把握の情報収集 ・看護師カンファレンス見学
（イ）医療・福祉の連携においてかかわる職種の役割を理解し、課題について説明することができる	
5. 高齢者理解	
（ア）高齢者とのかかわりの中で人生や現在の日常生活で大事にしているもの、価値観について理解することができる	・入所者とのオンラインコミュニケーション ・入所者の生活史聞き取り
（イ）高齢者が生活史を語る意義、援助者が聞く意義を考えることができる	
（ウ）高齢者との出会いを契機とし自らの高齢者観を述べることができる	
6. 専門職としての行動	
（ア）カンファレンスに主体的に参加し自分の意見を建設的に述べることができる	・実習最終日もしバナカンファレンス
（イ）実習において連絡・報告・相談を適切に行なうことができる　（割愛）	

(6) 高齢者の看護技術見学（学内実習・遠隔実習）

教員は、看護師が胃瘻栄養の注入や食事介助を実施しているところやリハビリテーションの状況を複数台のカメラを用いて多方向より撮影し、リアルタイムに中継して見学した。

(7) 看護師カンファレンス見学（学内実習・遠隔実習）

食事摂取量及び排便状況による与薬検討、受診結果を踏まえた健康観察の視点についての情報共有の様子を見学した。

(8) 実習最終日もしバナカンファレンス（学内実習・遠隔実習）

一般社団法人 iACP [6] が普及活動をしている 35 枚のカードを用いて余命半年下で人生最後にどうありたいか自身に問う「もしバナゲーム」を対面もしくはオンライン上で実施した。自身の経験を基に看護師としての意思決定支援方法をディスカッションした。

Ⅳ. 考察

1. 実習内容と目標の妥当性

ペーパーペイシェント事例やグラフィックレコーディング、ICF モデルを用いた看護過程展開、コミュニケーションでの対象との関係性構築、看護技術見学や教材動画視聴、KYT による高齢者看護技術、カンファレンス見学や医療ドラマ視聴、もしバナゲームでのチーム医療への理解、ケアプラン作成による生活自立支援検討、DIPEx 動画視聴や豊かな生を支える看護計画から高齢者を理解する実習を行った。

1）看護過程展開と高齢者理解

実習期間が短く、担当患者との関わりだけでは高齢者理解が不足するためペーパーペイシェント事例も併用し、実習した。ペーパーペイシェント事例は、臨地実習で担当する患者の病態や家族背景を想定し、加齢性変化や栄養状態、排泄、運動機能、患者や家族の心情などを意図的に情報に入れ、看護診断から加齢や疾患が身体機能に与える影響、障害のある患者や家族間の役割や関係の変化について検討した。患者に対するアセスメントを繰り返し省察することで、アセスメント内容に時間と観察の視点が増え、データ解釈の幅が広がる [7] ことから、疾患の知識や看護観察の視点の拡大になる機会を確保した。また、グループで看護過程を展開することで事例の情報を正確に共有し、学生一人では考えられなかったアセスメントの視点や根拠づけに気付くことができる [8] ことから、グループダイナミックスを活用し、協力して互いに知識の確認や補填し合いながら、患者情報を正確に共有する機会を設けたことは適切であった。患者を生身の人間として捉え、疾患と障害の状況をイメージすることが困難で限界があったが、動画教材を視聴し、実習目標が達成できるように補い、教材を使用することでの代替方法の可能性を見出した。

高齢者は、老化で身体機能が衰え、種々の障害を有しても、自分の存在意義を確認し、喜びを実感することで、やがて来る死を穏やかに受け入れることができ、老いを生きることの支援目標の一つとして豊かな生の創出が求められるため [9]、計画立案し、実施することは高齢者の健康問題とからだ・こころ・かかわり・暮らし・生きがいを総合的に理解し、全人的に捉える機会となった。実習最終日の報告会で、単語やイメージの両者を用いることで想起が容易で、長期記憶される [10] ことからグラフィックレコーディングを使用して、全員が高齢者に起こりやすい看護診断を網羅し、学びを深化した。

2）対象との関係性構築

オンライン接続することで高齢者施設に入館しなくてもコミュニケーションの機会を確保し、直接会わなくても代替方法としての可能性があることがわかった。担当入所者以外のコミュニケーションの様子を見学し、学生間で振り返り、高齢者の身体状況に応じたコミュニケーション方法の検討をする機会を設けた。しかし、高音質のスピーカーを用いてコミュニケーションができるよう機器の工夫をしたが、難聴や認知力低下の高齢者には感染対策予防のマスク着用やモニター越しでのボディランゲージを活用することが出来ず、中継者である教員が内容を再度伝達、復唱するなどの介在が必要であり限界があった。ナラティブ・アプローチは語り手と聴き手の人間関係を構築し、コミュニケーションや観察で到達できない理解に繋がり、老年患者の今後の生き方を見出し、自己決定力を導き出す看護ケアと言われている [11] ため、面会制限中でスタッフ以外の人との関わり合いができない高齢者との関わりや動画視聴により、学生は高齢者の想いに耳を傾け、身体的側面だけでなく、心理的側面についても理解しようとし、生きがいを創出する関わりをしていた。

3）高齢者看護技術

高齢者は重症化に繋がりやすい疾患のリスクを抱えていることが多く、早期発見や技術の習得を目的として、学内技術実習では ABI 下肢血流評価、残尿測定、体圧測定、褥瘡評価、義歯洗浄を行った。学生自身が看護師役と患者役の両者を体験しながら測定を行うことで、患者の心情理解や迅速且つ正確にデータを測定することの重要性を体感した。また看護学生は、臨地実習が十分にできないまま卒業することに不安を抱き[12]、臨床看護を想像して学ぶことで自身の将来像が描くことができることから[13]実習の機会を増やすために、動画教材視聴や看護技術の見学を行い、看護師の関わりや観察の視点の拡大、多職種の患者へのアプローチ方法を知る機会を確保した。対象に合わせて適切な理論を選んで（思考・判断）、提案する（表現）ことが必要であり、更に実践を通して振り返り（省察）をすることが深く学ぶことに繋がる[14]ため、見学後、患者の反応を通して看護技術が患者に及ぼす影響や意義を文献で振り返る機会を設けた。

4）チーム医療への理解

看護実践に不可欠な援助的人間関係形成の能力や専門職種としての役割や責務を果たす能力は、看護サービスを受ける対象者と相対し、緊張しながら学生自ら看護行為を行う過程で育まれるもの[15]で、多職種間のコミュニケーションやチームの中の看護師の役割の理解になり、内容や意義を記録し、振り返りの機会を設けた。振り返ることで状況を多様的な観点から内省し、応用できるように一般化・概念化して仮説や理論に落とし込み、実際に試してみる学修理論である Kolb 経験学修モデルと Gibbs リフレクティブ・サイクル[16]を用いることで知識が創造され、学習が生起すると考えられていることから[17]、医療ドラマ教材を場面ごとに切り取り、状況説明をし、振り返る時間を確保した。

終わりに

今後も新型コロナウイルス感染症を含め、臨地実習が出来ない状況が発生する可能性はある。学生の主体性を高め、看護実践能力の育成ができるように実習中の学生の反応、記録物などからアウトカム評価、プログラム評価を行い、実習目標達成に向けてより良い実習が出来るよう今後も実習病院と検討し、修正を重ねていく必要がある。

謝　辞

老年看護学実習を実施するにあたり、新型コロナウイルス感染症流行下の中で臨地実習を受け入れ、多方面への御協力を賜った実習病院及び高齢者施設の皆様には心より感謝申し上げます。

引用文献

1）厚生省 . 2007-04-16. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 . https://www.mhlw. go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf. (参照 2022-07-31)

2）一般社団法人日本看護系大学協議会 . 2021-04.2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査 B 調査報告書 . https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf. （参照 2022-11-06)

3）文部科学省厚生労働省 . 2020-06-01. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について . https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf. (参照 2022-07-31)

4）文部科学省 . 2020-03-30. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告看護学実習ガイドライン . https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf. (参照 2022-07-31)

5）特定認定非営利活動法人 (NPO) DIPEx (Database of Individual Patient Experiences) Japan. https://www.dipex-j.org/. (参照 2022-09-24)

6）当たり前にあるもしバナの世界 . https://www.i-acp.org/i-acp.html. (参照 2022-09-24)

7）上富史子 , 久野暢子他 5 名 . 成人看護学での紙上事例に対する学生のアセスメントの特徴 - 計量テキスト分析を用いて -. 宮崎県立看護大学研究紀要 21 (1) : 13-24, 2021.

8）早瀬麻子 , 木下純子 , 他 1 名 . オンラインでの母性看護学実習における学習効果 . 佛教大学保健医療技術学部論集 15:29-44, 2021.

9）正木治恵 , 真田弘美 . 老年看護学概論 . 第 2 版 . 東京 : 南江堂 . 178-185, 2018.

10）古城和子 . 文記憶におけるイメージの効果ー具体文と抽象文の想起についてー. The Japanese Journal of

Psychology, 50:3, 153-156, 1979.

11) 吉村雅世 , 内藤直子 . 看護ケアにナラティブ・アプローチを導入した老年患者の語りの変化の研究 . 日本看護科学会誌 , 24:4, 3-12, 2004.

12) 高岡寿江 , 石堂たまき , 他 1 名 . 新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い . 佛教大学保健医療技術学部論集 ,15,55-68,2021.

13) 太田晴美 , 大崎真 , 他 1 名 . 新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価 - 学生アンケート結果 -. 東北文化学園大学看護学科紀要 , 10:1, 27-42, 2021.

14) 新井英靖 . 看護教育に生かすアクティブ・ラーニング. 第 1 版 . 東京 : メジカルフレンド社 90-105, 2019.

15) 文部科学省. 臨地実習の在り方. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm.（参照 2022-09-24）

16) 松尾睦 . スキルがなくても 5 分の習慣で共感と傾聴のクセづけは可能 . Learning Design, 2018-09. https://www.jmam.co.jp/hrm/dir/dialogue_jh.html.（参照 2022-11-21）

17) 振り返りのモデル ,Gibbs のリフレクティブ・サイクル . https://heart-quake.com/article. php?p=3675.（参照 2022-09-26）

A Study of Geriatric Nursing Practice Program Methods in Response to Changing COVID-19 Infection Conditions

Yuri Kaneko *, Akiko Mizobe *, Etsuko Yoshihara *

＜Abstract＞

In response to the spread of the novel coronavirus (COVID-19), we changed and conducted the format of the on-site training within the third year basic nursing education course. In geriatric nursing practice program, it is necessary to understand health issues specific to the elderly, understanding the elderly, building relationship between patients and nurses, nursing skills for the elderly, team medicine, support for independence in living, views of the elderly, and professional behavior. In on-campus training, the nursing process was developed by creating paper-patient cases studies that incorporated information to develop nursing diagnoses of fall risk states, decreased activity tolerance, caregiver role tension, and decreased self-esteem status that are likely to occur in elderly patients. Geriatric nursing practice program was also developed by ethical issues, continuing nursing care and patient safety, that was examined by using KYT. During the on-site training, the students observed nursing skills on a wide range of subjects, focusing on the patients in their charge, and participated in distance lectures and medical team conferences with their clinical instructors. It is necessary to continue to discuss and revise the program with the training hospitals so that students can take the initiative and develop their nursing practice skills.

Keywords: COVID-19, geriatric nursing practice program, hospital practice, on-campus training, examining teaching materials

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University